

# 文化財秋季企画展

## 「中世の村とくらし」

### はじめに

野々市町では、現在55ヶ所の遺跡が確認され、各地で発掘調査を行なっています。

その中で、最近では中世の集落遺跡が、相次いで確認されています。

野々市町の中世の遺跡といえば、加賀の国の守護富樫氏が住吉町地内に屋敷を構えたとされる富樫館跡が有名です。発掘調査から、館を囲む堀、家臣団の屋敷、市場、寺院などが確認され、館を中心とした都市の様相が明らかになってきました。

一方、近郊の農村については明らかにされていないのが現状でしたが、今回紹介する徳用クヤダ遺跡をはじめとする遺跡が確認されたことで、中世の村の様子が少しずつ明確になってきています。今回の展示では、徳用クヤダ遺跡を中心とした出土遺物を紹介し、その周辺遺跡の遺物も交えて紹介することで、中世の時代をより身近に感じ、当時の人々のいきいきとした姿を感じていただければ、と考えています。

## 中世の野々市

平安時代後期以降、古代より確立されていた律令国家制度は崩壊し、武士の台頭による武家社会が生まれました。武家政権は徐々に支配力を強め、戦国時代には一国を治める大名が現れるようになりました。一方、室町時代には武士だけでなく、一般民衆も力をつけてくるようになり、各村では自治的な組織が生まれてくるようになりました。

中世の野々市でも武士は活躍します。中世前半には、林氏が町域南部一帯、富樫氏が本町・押野の北東部を領主経営の拠点地にして成長していきました。中世後半になると林氏は没落し、富樫氏が勢力をもつようになりました。南北朝時代、富樫高家は加賀国の守護職となり、現在の住吉町に館を構え、政治を司る場所としました。室町時代後半に起きた加賀の一向一揆（長享一揆）によって、富樫氏の勢力が急速に衰えるまでの約 150 年間、野々市は加賀国の中心地として繁栄していきました。



(住吉町地内・上幅6～7m、深さ2.5mの堀跡が確認されました)

時代	元号 (年号)	野々市 (加賀国) での出来事	日本での出来事
平安時代		武士 林氏、富樫氏の台頭	
鎌倉時代	建久 3 年 (1192)		源頼朝 鎌倉幕府開く。
	承久 3 年 (1221)	林氏没落 (承久の乱で後鳥羽上皇側に味方したため) 富樫氏が勢力拡大	承久の乱
南北朝時代	建武 2 年 (1335)	富樫高家 加賀国守護となる。 野々市に館を構える。	
	暦応元年 (1338)		足利尊氏 室町幕府開く。
室町時代	応仁元年 (1467) ～文明 9 年 (1477)		応仁の乱
	文明 3 年 (1471)		蓮如 吉崎 (福井県) で布教開始。
	長享 2 年 (1488)	加賀の一向一揆 富樫政親自害	
戦国時代		一向宗門徒の台頭	
	天正 8 年 (1580)	織田信長軍 加賀国侵攻。	
	天正 10 年 (1582)		本能寺の変
	慶長 5 年 (1600)		関ヶ原の戦い
江戸時代	慶長 8 年 (1603)		徳川家康 江戸幕府開く。

## 徳用クヤダ遺跡と周辺の遺跡

野々市町内には数多くの中世遺跡が存在します。特に、徳用クヤダ遺跡をはじめとする町の北西部では最近の発掘調査から新たな発見が相次いでいます。これらの遺跡について簡単に説明していきましょう。

### 長池キタノハシ遺跡

長池町の集落の隣で見つかった室町時代の村の遺跡です。村の中心には有力名主層の宅地と村堂が置かれ、その周囲に一般農民層の家並みが密集していました。

### 二日市イシバチ遺跡

鎌倉時代後半から南北朝時代の村の遺跡です。掘立柱建物や竪穴状遺構、井戸などを確認しました。家屋は散在して建つことから、散居村のような景観であったと思われます。

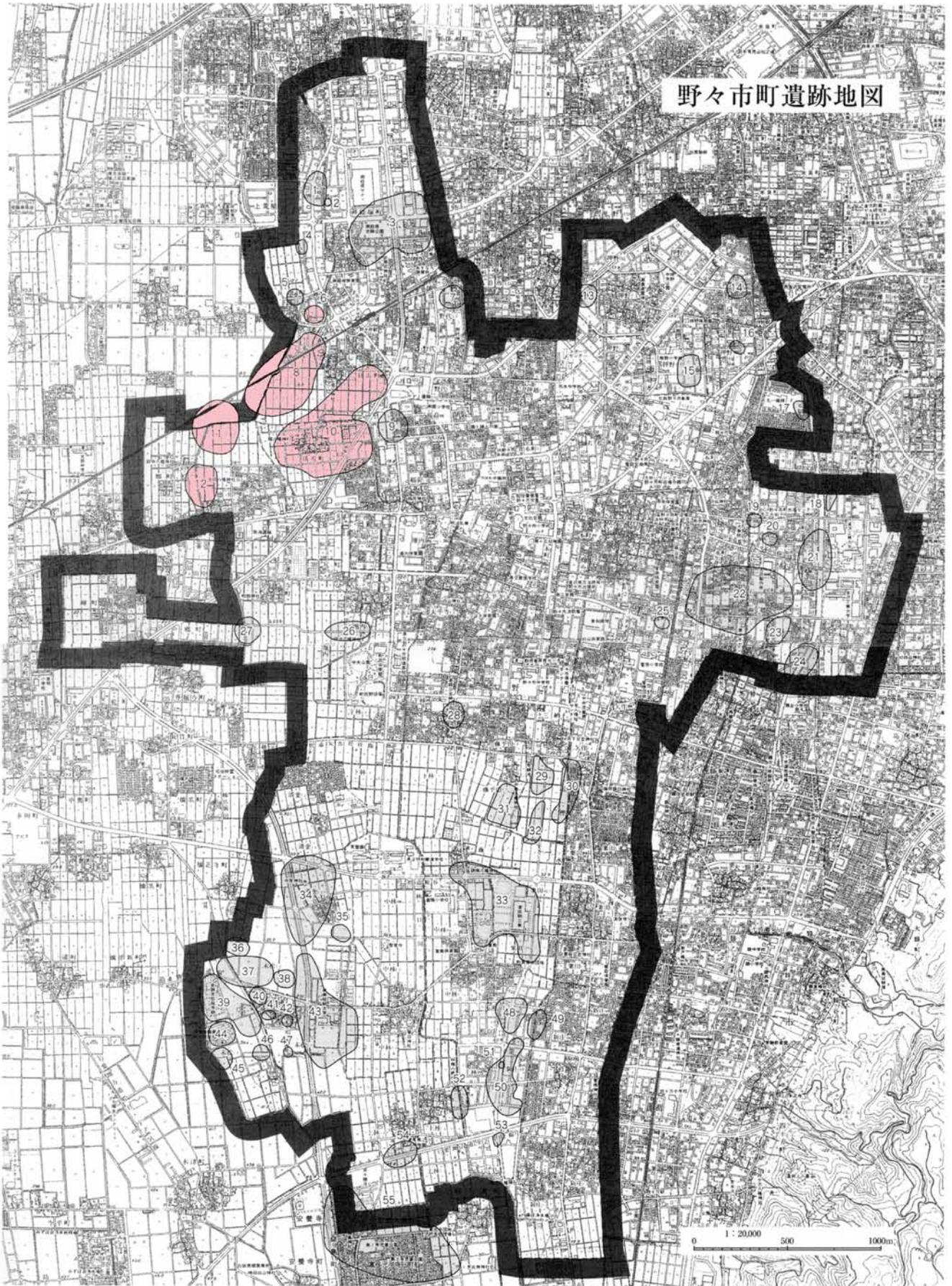
### 三日市A遺跡

二日市と三日市集落の近くに室町時代の村の遺跡を確認しました。掘立柱建物や竪穴状遺構、井戸などの遺構が密集した状態で見つかりました。これは、二日市イシバチ遺跡のような散居村から一定の場所に集まる集村へと変化したためと考えられます。

### 郷クボタ遺跡

鎌倉時代後半から南北朝時代の村の遺跡です。遺跡からは複数の掘立柱建物や井戸などが見つかっています。この村も二日市イシバチ遺跡と同様、散村の形状をしています。

野々市町遺跡地図



## 徳用村のようす

徳用クヤダ遺跡は弥生時代、古代、中世の村の遺跡です。今回は中世の時代に限定して説明します。

遺跡の西側には旧安原川が流れており、東側には大きな自然の谷が確認でき、中世の村は両者との間の微高地上に形成されています。

村の中心には大きな溝で区画された屋敷が存在します。屋敷の中にはいくつもの掘立柱建物跡が建っています。大きいものは主殿に相当し、小さなものは倉庫などの付属施設と考えられます。この屋敷は周辺地域を治めていた在地領主層の館と考えられます。屋敷の周辺には一般農民層の家が建ち並んでいます。これらの家屋は居住施設や作業小屋、物置小屋であったと考えられます。井戸は発掘調査での検出数が少なかったため共同で使用していたようです。

村の脇を流れる旧安原川は日本海沿岸にある大野<sup>おおのしょうみなと</sup> 荘 湊につながっており、物資を積んだ船が行きかっていたようです。また、徳用クヤダ遺跡の南側には旧北陸道が横断すると推測されます。中世の徳用村は旧安原川を利用した河道と旧北陸道による陸道が交差する交通の要衝地<sup>ようしょうち</sup>に所在します。



## 住まいの道具

### ・食膳具・貯蔵具・調理具

遺跡からは、さまざまな種類の道具（遺物）が出土し、そのほとんどは食膳具と貯蔵具、調理具で占めます。食膳具には土器、陶磁器で作られた碗、皿などがあります。この時代には木製の椀や箸も使われますが、町内は木材が残りにくい土壌のためほとんど見つかっていません。

貯蔵具には壺や甕があり、珠洲や越前地方などで焼かれた陶器が使用されます。調理用具には、食材を加工する陶器製のすり鉢やおろし皿があります。また、製粉にするための石臼も普及します。この他に食材を切る包丁や煮炊きのための鍋など鉄製品も一般化します。ただし、発掘調査では鉄鍋が出土することはほとんどありません。これは鉄鍋として使用しなくなった後、他の鉄製品に<sup>い</sup>鑄直されるからです。

これら日常の食膳具のほかに、天目茶碗や、茶入れの蓋、<sup>ふた</sup>風炉、<sup>ふる</sup>茶臼など茶の湯に関する遺物が多く見つかっています。このことから、農民層にも茶事のたしなみが浸透していたと推測できます。



台所の様子



武家の食事の様子

(「酒飯論絵巻」より。台所では包丁や鉄鍋を使い、食卓では色々な食器を使っています。)

・明かりと暖房

中世の野々市の人々はどのようにして暗い夜や寒い冬を過ごしたのでしょうか。当時は現代のように電気はありません。明かりは土師器皿に荳胡麻の油を入れ、油の中の芯に火を灯していました。この土師器皿を灯明皿といい、皿の縁に油が燃えた時のススが付き、黒くなるのが特徴です。

暖房は、囲炉裏、行火などを使用していたようです。囲炉裏は加工した石を組み合わせています。また暖房用だけでなく、鍋を使って食料などの煮炊きにも使用されます。行火は、石をくりぬいて中に炭を入れて使用します。側面には窓がついており、縦に格子状になっているものもあります。囲炉裏、行火は軟らかく加工しやすい石を使用しています。



灯明皿（イメージ）



行火  
(福井県一乗谷朝倉氏遺跡より出土)

・鉄の加工

中世に入ると、製鉄技術の発達によって、様々な鉄製品が普及し始めました。

鉄生産の一大拠点のひとつである能登半島では、高度な技術を要する鉄鍋や、  
梵鐘<sup>ほんしょう</sup>などを専門の職人が生産していました。一方、一般集落では、農具や武器・  
武具などの鍛冶<sup>かじ</sup>製品を製作し、その修理も行っていました。

徳用クヤダ遺跡では、鉄滓<sup>てつさい</sup>（鉄のカス）や鞆<sup>ふいご</sup>の羽口<sup>はぐち</sup>（送風のための用具）が出土しています。これらの出土品で、集落内で鍛冶を行っていたことが分かります。また、農具などを整備する際に使用していた砥石もこの遺跡から出土しています。砥石には荒砥、中砥、仕上砥があり、それぞれ石質に違いがあるため、使用目的によって使い分けていました。



中世の建築工事の様子

（鉄製品を使用して仕事をしています。「松崎天神縁起」より）

## 墓地の風景

発掘された中世の村の周囲から、<sup>ごりんとう</sup>五輪塔と<sup>ほうきょういんとう</sup>宝篋印塔と呼ばれる石塔が出土しました。両塔は死者を葬った墓標及び<sup>くようとう</sup>供養塔として立てられたものです。

五輪塔は密教の五大思想（世界は空風火水地から成り立つ。という考え）を上から団形・半円・三角・円・方形に表したものです。それぞれの部位は分割しており、これらを順番にのせて完塔となります。なお、円形の水輪には仏を文字で表した<sup>ほんじ</sup>梵字が刻まれています。

宝篋印塔は五輪塔と共に各地で一般的に見られる石塔で、上部の笠に段を設け、四隅に隅飾り突起を持つのが特徴です。

この時代のお墓は土坑墓、周溝墓、配石墓など多様な形があり、埋葬方法も火葬や土葬など様々です。

徳用クヤダ遺跡からは石塔しか見つかっていませんが、村の近くにはいくつもの墓が設けられ、その上には五輪塔や宝篋印塔がそびえ立つ風景があったことでしょう。



三日市 A 遺跡で見つかった中世墓  
(溝で四角く囲っているのが墓です)



餓鬼草紙  
(絵図で見られる墓。土盛りの上に木柱や五輪塔を立てています。)

## いたび 下林の板碑

下林の薬師日吉神社には、室町時代の板碑が現在も残っています。

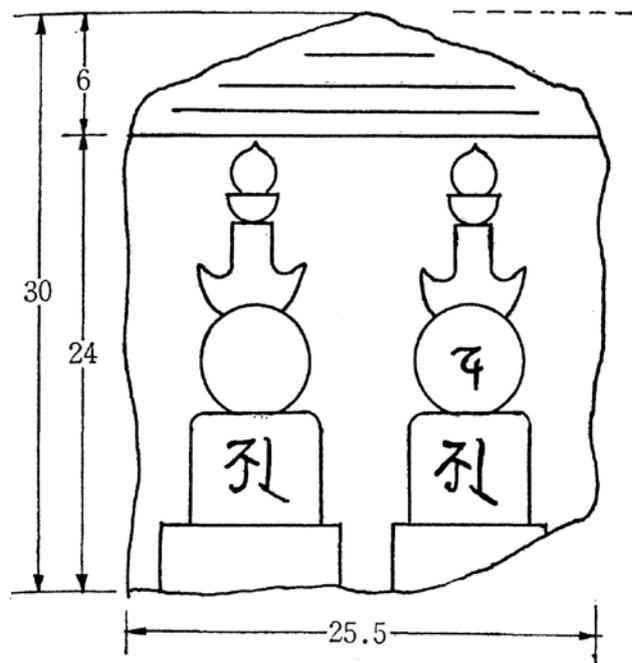
板碑は、板状の石に梵字・図像・没年を示す紀年銘などを彫って表現したもので、主にくようとう供養塔に使用されていました。

下林の板碑は、五輪塔2基と大日如来の真言とされる梵字が刻まれています。

五輪塔・宝篋印塔などの中世の石塔物は、この下林の板碑のように、地中に埋もれることなく地上に残っているものもあります。町内では墓地や神社などで見ることができます。



下林の板碑



板碑の実測図  
(2基の五輪塔が刻まれています。  
数字の単位はセンチ)

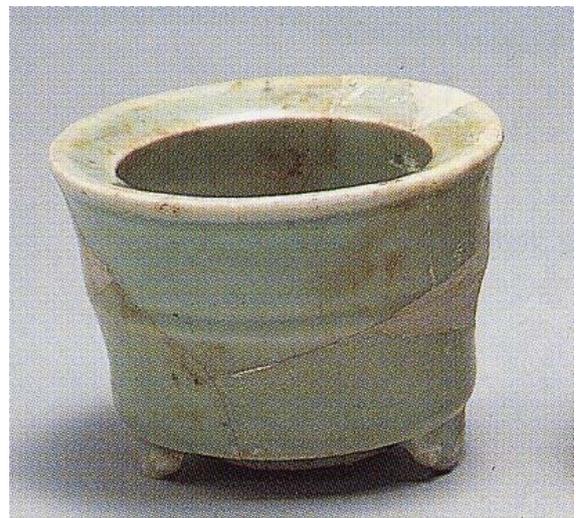
## 青磁の香炉

平成15年度の徳用クヤダ遺跡発掘調査で、青磁の香炉の完形品が出土しました。この香炉は中国の龍泉窯<sup>りゅうせんよう</sup>で焼かれたもので、竹を模倣しています。香炉は香を焚く<sup>た</sup>のに用いる容器で、もともと仏具として使用されていました。中世になると中国製の磁器は大量に日本へ運ばれてきますが、香炉は非常に少なく当時は高級品であったようです。後に茶道具や装飾品としても使用されるようになりました。

出土した香炉は、在地領主の屋敷地内の土坑から見つかりました。土坑は直径2.4mの方形をしており、中からは瓦質の香炉や瀬戸焼の花瓶なども一緒に出土しています。この大きな穴は屋敷地内に設けられた墓と考えられ、出土した香炉は副葬品と想定されます。



香炉が出土したときの様子



徳用クヤダ遺跡出土と同型の香炉  
(福井県一乗谷朝倉氏遺跡より出土・よみがえる中世(6)平凡社より)